

大戸川に侵入したオヤニラミについて～観察会と環境DNAを用いたアプローチ～

藤田 宗也（株式会社フィッシュパス）

はじめに

オヤニラミ(*Coreoperca kawamebari*)はケツギョ科オヤニラミ属に属する純淡水魚である。日本における自然分布域は京都府以西の本州、四国、九州北部であるものの、近年国内移入種として分布域の拡大が確認されている。特に、滋賀県においてはこれまでに野洲川水系、日野川水系、大石川水系、宇曽川水系の4水系に導入と定着が確認されていた。本報告では、それに加えて2025年9月に滋賀県大津市の大戸川にて行われた観察会で新たに導入が確認された本種について、環境DNAで明らかになった侵入の現状および発見以降行ってきた駆除の成果について取りまとめた。

発見に至った経緯とその後の動き

オヤニラミが確認された大戸川の流域では、2023年から定期的に児童を対象とした観察会が行われている。大戸川における本種は2025年9月24日に行われた筆者が講師を務める観察会にて、参加者の中学生が、捕まえた個体の種名を尋ねる形で筆者に提供をいただいたことで侵入が明らかとなった。その後、観察会中の参加者に呼びかけることで、当日中に計4個体が採集された。観察会以降は筆者の採集仲間に声をかけ、年内で11回の駆除および環境DNA(MiFish法)による調査を行った。

採集されたオヤニラミと侵入時期の推定

オヤニラミは計11回の調査で合計16個体が採集された。採集された個体は49.3mmTL～101.9mmTLであり、体サイズは3つの群に分けられた。また、採集個体数は駆除日を追うごとに減少傾向にあり、11月以降は採集されない日が続いた。環境DNAでは31分類群が検出され、オヤニラミは採集地点付近の石居および稻津にてDNAが検出された。また、オヤニラミ以外に稻津においては低リード数ながらもウツセミカジカのDNAが検出された。オヤニラミおよびウツセミカジカは2023年11月に行われた採捕および環境DNAにて行われた魚類相調査においては確認されていない。そのため、少なくともオヤニラミにおいては2024年以降に新たに侵入した外来魚であり、個体数が少なく分布範囲が局所的なことから侵入の初期段階であるといえる。

外来種モニタリングにおける観察会の役割および外来種駆除のための枠組みの提案

本事例では筆者の”ホームフィールド”である大戸川にて、観察会を契機に侵入初期のオヤニラミを発見することができた。また、環境DNA技術を活用し、早期に仲間内での駆除活動を始めることで、ある程度有効な駆除効果が認められている。定期的に愛着を持ったフィールドに通い、観察会や環境DNAを用いてモニタリングすることで早期に侵入を確認でき、効果的な駆除に繋がった事例であるといえる。

一方で、早期に発見に至ったとしても、仲間を集めて大規模な駆除を行うことは一般的には難しい場合もあり、早期に人海戦術的な防除を行うことが難しい場合も考えられる。そこで、本報告では最後に、自身の”ホームフィールド”を持つ者同士の、早期防除に特化した駆除コミュニティの形成について提案を行う。